
踊り子と魔術師

星垣ケイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

踊り子と魔術師

【NZコード】

N9277D

【作者名】

星垣ケイ

【あらすじ】

時は37XX年。絶滅した人類の後に生まれた新たな命、"オズ"。不思議な力、魔術操るオズ達は、1000年前の様に、悲劇を起こそうとしていた……。

1000年前、大きな戦争と自然災害により、人類は絶滅した。そう、思われていたのだが、たった1人だけ、生き延びた者が居るという。

その名を知る者が居なければ、真実を知る者も居ない。

ただ、その命は、とても美しかつたらしい。

それも、真実かは知らないけれど。

が、しかし最後の命も、そう長くは続かなかつた。食べる物も何も無い場所で生きるなど、人間である限り、不可能な話だつたのだ。

そして最後の命は、死ぬ寸前、強く願つたらしい。

”どうか、この**地球**に、永遠をください。失わない、力をください”

…と。

それを神様が聞き入れたのかは誰にも分からない。

けれど、数年後。その願いが叶つたのか、**地球**には新しい命が生まれた。

その命の総称は”オズ”。

それは、”人間”とは外見を覗いて、全くの別物だつた。

”オズ”には、不思議な力がある。

それは、”魔術”。国や地域によつては、”魔法”とも呼ばれてい

るそれは、本当に不思議な力だつた。

魔術は、**地球**にある自然を操る力で、神様が2度とあの悲劇が起きた様に、と創つたモノだ。と人は言つ。

魔術は、人によって操れるモノも違う。

中には、全てを操る者や大きな力の者も居るが。

そういうた者は”能力者”と呼ばれる。

そんな不思議な力、魔術。

そして、最後の”人間”の生まれ変わり。

それらの存在が、1000年前の悲劇を再度起こそうとしているなんて、

一体、誰がそんな事を予想しただろうか。

00・プロローグ（後書き）

次回、『01・踊り子』

お楽しみに。（アニメの次回予告っぽく）

後書きです。正直何書いたら良いか分かりません。

後書きなんてもう何度も書いてるのに…。

まずはちゃんとした後書きの書き方をマスターしよう。（え

37XX年。技術や文化が大きく発展し出した時代。
地球上には、”舞姫”と呼ばれる存在が居た。

とある大都市の中の広場。

そこには、何人もの、恐らく市民であろう人が集っていた。

「一体何があるの？」

ある婦人が誰にでも無く問う。

「知らないの？此処に、舞姫様がいらっしゃるのよ」

別の婦人が答えた。

「まあ、舞姫様が！」

「ええ、ほら今日は降臨記念日でしょう。だから…」

婦人が言いかけた時、周囲がわっと湧いた。

そして人々が道を作り、その道を歩く姿があった。

「舞姫様が踊られるのよ」

空に輝く金の月に照らされて輝く噴水を背に、1人の少女が広場の中央に立つた。

その姿は溜め息が出る程に美しく、神秘的で。その場に居た誰よりも、魔力で満ちていた。

「これより、儀を始める」

司祭の男が広場中によく響く声でそう告げる。

そうして、誓いの言葉や祝いの言葉といったものが終わり、人々は落ち着かない様子でいた。

そして司祭が、

「最後に、舞姫による祈りの舞、」

言いかけた所で、盛大な拍手と歓声が上がり、司祭の声は書き消された。

「待つてました、舞姫様！」

「美しい方よねえ、本当に」

「舞姫様は女神だ、救世主だ！」

次々に褒め言葉なのかお世辞なのか分からぬ言葉が人々から出でいく。

「…それでは、舞を始める」

司祭が半泣きで言い、演奏者に合図を送った。

暫くして、琵琶や太鼓による幻想的な音楽が流れる。と、人々の声は一瞬で静まり、ただ、舞姫という存在を瞬きもせずに見つめた。

音楽に合わせて踊る少女を。

くるりと回ったり、空を仰いだり。

その一つ一つの動作はどれも美しい、としか言ひようが無かつた。

月の光を浴びて輝く茶の髪。星空を映す黒い瞳。

その全てが美しい少女は、地球の全ての人々に崇められ、生きていた。

そしてその時、世界は、彼女を中心に回っていた。

不思議な紋様を持つ、”人間”の生まれ変わりである少女を中心に、回っていた。

01・隠子（後書き）

黙へていらぬなれど。終わつ（こわつ）

「舞姫様が踊られるんですって！」

「まあ、姫様が！ それは行かなきや」

そんな会話をする婦人達が横を通り過ぎて行く。
こちらを見る「とも無く、正面を向いて、通り過ぎる。
まるで自分など、眼中に無いかの様に。

「あやつ、」

暫くの間、ただ何とも思わずその場に立つて居ると、小さな悲鳴が
聞こえた。

「……」

声の方を見てみれば、そこには黒いマントの少女がいた。

「いつたあ……ちょっと、何処みて……」

頭を擦り、尻餅をついている少女は、漆黒の瞳でこちらを見上げて
いた。

「……お前が勝手にぶつかったんだう！」

「なつ何よ、その口のきき方は！ 私を誰だと……あー！」

黒目の中の少女は、何かを見つけた様な顔をした後、舌打ちをする。

「やっぱ！ 見つかった」

慌ててフードを被り直した少女は、

「後で詫びて貰うからねつ！」

言い残して走り去つて行つた。

そして、後ろから息を切らしながら、何人かの兵士がこちらに向か
つて走つてくる。

「に、逃がした、か…ま、い、姫え…」

途切れ途切れに言つ兵士。

その舞姫というのは、もしや先の少女だらうか。

何やら面倒事に巻き込まれそつだつたので、その場を去ることにした。

「最後に、舞姫による祈りの舞を…」

いつもより騒がしい広場。

そこに引き寄せられる様に行く。

(…あれば)

騒ぎの中心の漆黒の瞳は、確かにあの時の少女だった。

「結局、捕まつたのか」

暫くして舞が始まると、辺りは一瞬で静かになる。

(舞姫、か)

人々はその姿に見とれ、夢中になつていたが、しかし。

その舞姫は、心なんて無い、人形の様に踊つていた。

そしてそれに気付いたのは、心無き少年だけだつた。

02・魔術師（後書き）

次回、踊り子に異変が起る……はず。
お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9277d/>

踊り子と魔術師

2010年12月10日23時59分発行